

第一回美術展覽會合評

(一)

石井天風 橋本正素 尾竹竹坡
中倉玉翠 長安雅山 中島光村
信近春城 山脇荷聲 山田敬中
山内多門 安田朝彦 阿倍蘇春
島田墨仙 飛田周山 (以上イロハ順)

(本篇は十一月十六日午後右の諸氏偶然文部省展覽會に出會し、作品觀覽の上、三宜亭にて研究の爲批評會を開き、其合評の筆記にして、特に研究的批評の聞くべきものあるを信す。篇中評者の名は一々之を掲げず)

佐野曠筆 『月色水聲』

○京都の出品の山水中忠實で骨折つた畫で、殊に丁寧を描いてあるに拘はらず配色が缺けてる。地面の色など墨畫なら墨許りで描いたら宜かつたらうに或は筆敷に色があつたりしてゐるのほどうも自然を缺いてゐる。若し土坡などから杉も墨で筆力を見せたのなら凡て墨でよかつたらう。全體にどうも京都の畫は配色に重きを置かぬが、之も其一例である。

▲右に同感で、京都の畫は凡て黒ぼかしくつゝいてゐるが、其中では最も好い。然し忠實にやつてある丈で、色の調和は前者と同感で缺けてゐると思ふ。失敗の作だが全く色彩なしの方が成功したかと思ふ。東京と西京と畫家の間に趣味が違つてゐるが、西京にも参考となる點がありはしないかと思ふ。
▼夜を描くには黒過ぎたから月の明らかなさが無い
●一體に淺薄で日本畫の詩的なのを心細くしたものと
○ポンチ式が長所短所であると思ふ。
▲兒供臭い繪である。
□調も屆き情もある。
●兒供の情がよく出てると思ふ。
△情が卑しいと思ふ。
▽面白味はあるが、現はし方が細かきで卑俗に見える。今少し大きい考で現はしたい。田舎の景色は今少し薩張りど明かである。
×素人間には好いが技術はまだ不熟練で、仕上げに未熟な點があり見える。
◎兒供に優さしく受けるのは見えるが、やり方は確に幼稚である。ポンチ式は語氣は荒いが多少さうである。兒供は無邪氣に情を受けたと思ふが完全な情を現はしたとは言はぬ。
▼現はす爲に形相をポンチ式にしたかと思ふ。

三宅吳曉筆 『梅に鶯』

○模範展覽會に出す作とは思へぬ。其人が下手ではないが形式的に畫いたのを探つたは如何かと思ふ。形式的が悪いでは無いが評する價値が無い。今少し新奇な考とやり方をし度いと思ふ。
▲臭氣紛々と思ふ。
□更に餘韻とか餘情とかを認められぬ。
島崎柳塢筆 『西鶴のおなつ』

○一寸見た時はよかつたが色が氣持よくない。
▲陰鬱が缺點である。
△陰鬱を現はしたはよいが不快の感を起させる。
▲此畫に對する強い感じを受ける。勉めた方法だらうが、景色からいふと人物が客になる。しかかも人物より顔が客になつてゐるので、根本から間違

うは條理は立てられまい。之は作者が畫によつて西鶴のお夏の或る場合を同情して描いた。夫が現はれざるはよい。必ずしも畫で現はせぬと言はれぬ。然し此畫が果して現はしてゐるか如何かは疑問である。
●惱める女を描いて現はせなかつた。夫は惱める女を描く爲に模様から凡て惱めるものにとやうといふから遣り過ぎでは無かつたか。現はし方が間違つたものと思ふ。此作者は顔を研究することが必要である。
▲配景で現はさうとしたので、景によつてやつた利口な遣り方だと思ひます。
山本梅花筆 『秋溪山水』

●舊派の畫としては穩かな遣り方だと思ひます。



『岩上の孔雀』 (美術協會審査員)

望月金鳳筆

●苦心は認められるが、複雑な色なんか一種の描き方をした、その遣り方は賛成である。然し線や色の悪い所許り見えて肝腎の苦心の表情が後に這入るのは悪い。
□兎に角苦心した割合に其意味を感じない。夫が缺點である。
◎十分な意味が現はれてない。
▽あといふ風な小説とか芝居を仕組んで畫にする

と、西鶴のお夏とする所が何處で見えるか。畫家があるいふ所を捕へて描くのは困難だらう。畫題が無かつたら何處が西鶴のお夏が説明しにくいと思ふ。
×歴史といひ假作といひ毛色があるから一概にさ

▲一致しかつて畫に近い、南畫として成功しかつてゐる畫だと思ふ。
▼三宅君の作と同じでは無いか。三宅君の畫は行つてゐるが、此畫はそこ迄は行かぬ。
●趣致もあり描法もあり完成に近いものとして賛成する。

書畫一體といふ流儀は美術品知らぬが、思想の反映として見たら吾々が崇拜すべきものか如何か疑問だと思ふ。全體此流は觀察力は鈍い。然し此畫は觀察力はあると思ふ。然しかういふ畫を此展覽會に出すべきものか如何かは疑問である。之を出させることは南畫に對する死活問題で、文部省ではつらいだらうが、考へて貰ひ度いものだ
▽南畫として成功したもので、一種の感じはある。

然し此美術展覽會に出すもので無い。完全の美術品ではない。
○非常に心持好く見える。思想なんかは零のやうに觀察されるが、意味の無い好い心持を與へるやうに見える。一種とるべき貴い所がありはすまいか。
◎かういふ畫は南畫で有りふれた畫丈けに無理なく出来たと思ふ。
●南畫は此畫の一種争ひから出来たので、信じた所を描けばよいといふからは、或る程度迄或る型を造り、底迄世の中に欲を持たず描けば好いと思つてゐるに違ひない。夫から言へば稍や域に達したものと上乗の作と思ひます。
○余模範展覽會にも出すべき畫だと思ふ。三宅君の繪の趣味と此畫の趣味とは違ふ。此畫は詩的趣味がある、寫實は無いが寫意は見える。一種の筆で描きこなした者である。眞美術の一種に含まなければならぬ。之が十分に美術の眞髓とは行かぬが一種の趣味は發揮してゐる。只だ之に足りない趣味が出来たら好いと思ふ。
●三宅君の畫と同等の型の香がする。
○風韻は畫に必要だが、秋溪山水といつて何處に秋の心持が現はれてるか、吾々は秋溪山水に對しては何等の必要が無いと思ふ。此畫に氣韻があるらしく描いてゐるのは癖ではないか。
●例へていふと醬油は必要なのであるが、夫かといつて飲み物にはならぬ。かういふのは要素ではあるが夫を以て飲み物にはすめられまい。
○景色合ひはさうも秋景を現はして居らぬ。其形に至つても山水と其人物とは形を具へて居らぬ。然し溢れる氣持はある。直には説明せぬが、夏共冬共見えぬ。筆墨が簡單で吾々が閑雅な南畫の特色は現はれてゐる。確にざらにあるつくねいも山水とは違つてゐる。
八田青翠筆 『冬の朝』

△寒い情を現はす考は見えるが、粗い筆の使ひ方は京都畫家の通有性の弊のやうで、どうも落ち着きを缺いてゐる。
●畫面はさうも粗だが、考へて描く人だと見えて其心持を嬉しく思ふ。然し此作は全然失敗で統一を全く缺いてゐる。
島田墨仙筆 『俊寛』

○此作に對して自分は好評を少しも聞かず悪評をのみ耳にしたが、自分は此畫に賛成したい。即ち俊寛の態度と彼の動きとを。然し突兀たる滑稽な岩は理窟なしに出てゐるのと、怒濤に對する水の動かぬことは缺點だと思ふ。
▲此畫の岩や人物などの不調和は缺點であると思ふ。然し性格から言へば敬服である。只調和が破れた爲夫が現はれぬのは失敗であると思ふ。

○此作に對して自分は好評を少しも聞かず悪評をのみ耳にしたが、自分は此畫に賛成したい。即ち俊寛の態度と彼の動きとを。然し突兀たる滑稽な岩は理窟なしに出てゐるのと、怒濤に對する水の動かぬことは缺點だと思ふ。
▲此畫の岩や人物などの不調和は缺點であると思ふ。然し性格から言へば敬服である。只調和が破れた爲夫が現はれぬのは失敗であると思ふ。

○此作に對して自分は好評を少しも聞かず悪評をのみ耳にしたが、自分は此畫に賛成したい。即ち俊寛の態度と彼の動きとを。然し突兀たる滑稽な岩は理窟なしに出てゐるのと、怒濤に對する水の動かぬことは缺點だと思ふ。
▲此畫の岩や人物などの不調和は缺點であると思ふ。然し性格から言へば敬服である。只調和が破れた爲夫が現はれぬのは失敗であると思ふ。